

同志社大学のPBL

プロジェクト学習とポートフォリオ(1)

同志社大学文学部教授 山田 和人

はじめに

同志社大学では、プロジェクト科目を二〇〇六年から開講してきた。本科目の最大の特徴は、テーマの公募制と往還型地域連携モデルの構築にあった。教育プログラムとしては、全学共通教養教育科目に設置されている数少ないPBLの試みであった。PBLは、理工系、看護医療系、情報系、社会学系の専門科目のなかに導入されることが多かった。教育方法としては、PBL(プロジェクト・ベースド・ラーニング)をベースにした学生主体の社会連携型のチームPBLであった。二〇〇六年度の現代GPにも採択され、昨年度末までPBLをめぐるシンポジウムや報告書、調査訪問、PBL研究会の活動等を行ってきた(『公募制のプロジェクト科目による地域活性化取組報告書―往還型地域連携活動のモデルづくりを目指して―』二〇〇九年三月／『PBL研究会 報告書』二〇〇九年三月)。

わけではない。そこで、こうした流動性の高いプログラムの場合、学習者を制御するために活動記録を提出させることによって、その活動を把握することを目指すことがしばしば行われる。

しかし、これは学習者に義務感を強く与えるためか、その記録は通り一遍の報告になるか、その負担から活動報告の提出を止めようとする場合もある。こうした個人の活動の把握を目的とした学習履歴の記録化は、期待するほどの効果を得られない。

むしろ、学習者を制御するための手段として学習履歴の記録を求めるのではなく、学習者自身が自らの学びの全行程を把握することによって、自分の進むべき方向をつかむ方略として、自分を振り返る必要を強く感じるようにならないければ、学習履歴を自らモニタリングしようとする姿勢にはならない。学習者自身が、リフレクションが必要であると感じられる環境や条件に置かれることによって、学習者の自発的なモニタリングの意欲が生まれる。

相互参照型ポートフォリオ

そうしたきっかけを得る可能性は、従来の個人学習の中では低い。むしろ、チーム学習の中でつかむことができる場合が多い。つまり、個人学習の中では自分の中の他者を介して自分自身をモニタリングすることになるが、チーム学習の場合には、チームのメンバーという愛着のある他者との対話やまなざし、交

その過程において、豊かな沃野としてのPBLの教育力を実感してきた。今回は、ポートフォリオの視点からPBLの学習効果について考えてみたい。

PBLとポートフォリオ

PBL(プロジェクト・ベースド・ラーニング)は、テストやレポートの成績による成果重視の教育ではなく、プロセスを重視する教育であり、学習者がプロジェクトに自発的、自律的にチームで取り組んでいくことによって、自分自身のもの見方や考え方を振り返ることを通して、いままで見えなかった自己を発見していくことを目指している。そこでは、そうした気づきによって自分自身の学びの深化を自己評価できるようになりフレクション(振り返り)を重視している。

プロセス重視の学習を評価するためには、個人の学習履歴をポートフォリオとして記録していくことが有効である。元来、ポートフォリオを通して自分の行動や認識傾向を把握しやすくなる。お互いの学習履歴を参照しあうことによって、チームの中の自分のポジションを意識するようになるとともに、チームに貢献したいという気持ちが強くなる。

そうした意味では、プロジェクト学習は、常に現在進行形であり、時々刻々変化する状況の中で、トラブルやリスクを回避したり、克服したりしながら、問題解決に取り組んでいかなければならない。困難な問題を解決しようとチームで取り組んでいくことで、メンバーとの信頼関係は強められ、チームへの帰属意識も強くなる。プロジェクトを遂行するプロセスで、自分自身を振り返り、次の行動を自分で準備するようになる。

このようにチームで各自の学習履歴を公開することによって、チームに対する貢献度が視覚化されるという効果が得られる。たとえば、活動記録(時間・場所・内容・振り返り)を学習支援システム等にアップロードすることで、メンバーがお互いに相手の活動記録を参照し合うことができるようになる。それによって、チームに属している学習者は、チームのメンバーの活動実績を相互に確認することになり、メンバーに対する感謝と敬愛が生じることになる。

その活動記録に対してコメントできるようにしておくこと、報告者に対する感謝と励ましが意志的に表明されるようになる。このフィードバックが、チームの学習者の学びの意欲を強くするとともに、チームに対する帰属意識

リオは、紙挟みを意味しているが、紙の束をただ挟むということでは、ポートフォリオにはならない。その紙にページ付けをすることによって、一定の秩序を与えること、そして、また、その配列を変えて再定義していく行為をポートフォリオプロセスととらえておきたい。

このプロセスで、振り返りと多くの気づきを得ることができる。自分自身の学習のすべてを記録として残し、それを手がかりにして、自分の進むべき方向を自己決定していくことである。ポートフォリオは、自ら振り返り、自ら気づき、自ら行動を起こしていくための未来の羅針盤であるとともに、自分自身の学びのプロセス評価のための行動記録とも言える。

通常の講義科目の場合と異なり、実践型・参加型のPBLの場合、学びの全過程を把握しているのは学習者自身であり、授業担当者ですら学習者の行動をすべて把握しているわとプロジェクトに対するモチベーションを向上させる効果がある。

プロジェクト学習の学習曲線

とりわけ、プロジェクト学習では、そうした気づきが得られる可能性が高い。課題を自ら発見して取り組んでいくという創造的な営みは、学習者のモチベーションを強く刺激し、他者とのつながりを意識する社会的な行動を誘発していく傾向が顕著である。それは、プロジェクト学習における学習曲線にも現れる。

通常の座学的な授業では、学習曲線は、ステップ・バイ・ステップの安定した右肩上がりに積み重ねられていく傾向がある。これは、いわば教科書のある学習であり、正解が準備されている知識・技術修得型の学習だからである。しかし、プロジェクト学習の場合には、学習者自身が設定した現代社会の課題を地域・社会と連携しながら解決を目指していくために、学習状況が流動的であり、時々刻々の変化に対応しながらテーマの再構築を繰り返して、最終的な解決策にまで至る必要がある。いわば教科書のない学習であり、答えが準備されていない学びである。それは、学生の自発的・自律的な学習形態であるために、次のような逆S字曲線を描くことになる(図1)。

最初は未知・未体験の対象に対する興味と関心から高い学習意欲を示す。その後、企画を行動計画に落とし込む段階になると、議論が空転してチームのモチベーションも停滞気

■プロジェクト科目の学習曲線

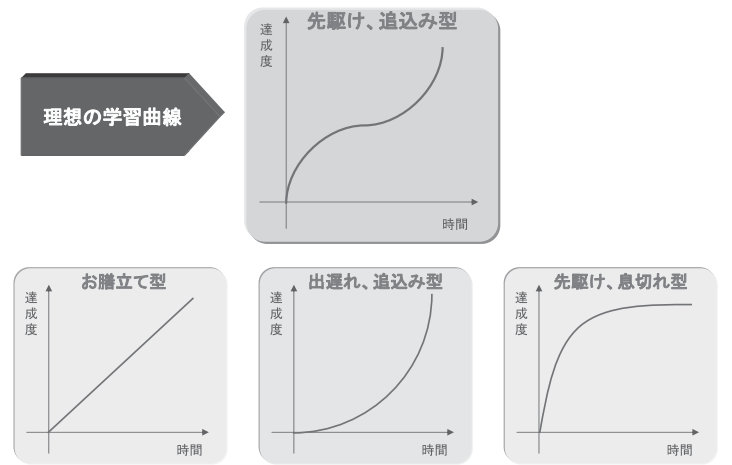


図1 学習曲線

味になる。緊張した状況の中であるにもかかわらず、中だるみの時期を迎えることになる。それが逆S字曲線の踊り場の時点である。そこで、学習者は、課題設定の見直し、チームの再構築、組織・役割・ルールの見直しを自分たちで行う。そうして、チームの再編成を行う。それによって、プロジェクトがチームとして再定義されて遂行されるようになる。つまり、この過程を経ることで、プロジェクトが一人一人にとってかけがえのないもの

なっていく、強い愛着の対象となる。そこからは、自発的、自律的に活動が行われるようになる。これが踊り場から急上昇していく段階であり、プロジェクト学習の理想の学習曲線である。

この踊り場の時期は、短いこともあれば、一か月から二か月に及ぶ場合もある。この時期に学習者の学びは深化する。担当者は、これをいわば孵化しようとしている段階ととらえて、学習者がどのようにこの時期を脱出していくのか見守ることになる。

こうした踊り場を脱出するきっかけは、学習者とチームのリフレクションの中から生まれる。本来、何を目指していたのか。自分たちは、何をしたかったのか。こうしたことを振り返ることによって、何が問題であるのかを自ら発見していくプロセスが重要である。

自己検証とこのポートフォリオ

その時、学習者にとって自らの学習履歴がもっとも大きな役割を果たすことになる。すなわち、活動日誌や議事録、企画書、行動計画書、タスク表、報告書等を見直していくことで、問題解決の糸口を探し出すことができる。おそらく、どんな参考書よりも、自分たちの歩みそのものが最も優れた教科書であり、その歩みの中にヒントは隠れているはずである。

それらを見直して何が自分たちの行く手を遮っているのかを俯瞰的な視野から検証していくことがポートフォリオプロセス評価であ

る。もしも、こうした検証の手だてがないとしたら、プロジェクトは迷走していくばかりであり、チームのモチベーションも引き上げることができなくなる。

ポートフォリオがもっとも有効に働くのは、この時であろう。プロジェクトのターニングポイントを把握し、適切に対応していくための自ら行う歴史の足跡の確認・検証である。自分とチームやプロジェクトとのかかわりについても、これらの学習履歴を振り返れば、個々のターニングポイントを知ることができ、自分が劇的に変化する時をそうした記録の中に見いだすことができる。

自分の成長を自分自身が認識でき、まさに「その時」をつかむことができる。学習者は、こうした「その時」をとらえることのできるようになった時に、はじめて客観的に自己評価できるようになる。

この踊り場に至るまでに、そうしたポートフォリオを作成していく習慣を身につけさせておくことが重要である。そのためには、やはり、一つ一つのファイルを公開して、チームのなかまとの間で友好的なコメントの交換が励みとなる環境と条件を整備しておくことが望ましい。

こうしたいわばネットワーク型のポートフォリオとして、デジタルポートフォリオが最も有効である。